

# 自然のチカラ、 住まいの素材

## 本当の建築塾

今回は、今までの連載で解説をさせて頂いた各素材を使用し、私の考え方を取り入れた家づくりを、実際に沿ってご紹介をさせていただきます。Y'sが実践した「土の家」についてお話ししましょう。

解説◎山本康彦  
取材協力◎株式会社ワイズ

### 『海と緑と土の家』

早いもので各回にテーマを設けて『本当の建築塾』の連載をはじめさせて頂いてから3年の年月が経ちました。今回は、これまでにお話をさせて頂いた色々な自然素材を使用した、実際の家づくりをご紹介しますと思います。手前味噌ではありますが、筆者（級建築士）が営むY's（工務店）のモデルハウス『土の家』です。



### 『土壁』の陰影

『土の家』の名の通り、この建物の内外では多くの土を素材として使用しており、主要な部屋は土壁を採用しています。家中で一番身近にあり、手に触れる機会が多く、一番面積があるのは床でも天井でもなく、壁です。その壁の素材、仕上げ方法によってその家の持つ印象が変わってしまうほど、壁は重要な部位です。そして素材のもつ性能を活かせば、見た目の美しさだけでなく、

温熱環境的にも快適な暮らしを約束できることにもなります。

昨今の家づくりでは、壁は白く、窓はできる限り大きくと希望される方が少なくありません。勿論、白い壁にすれば部屋が大きく明るく見える可能性もあり、壁よりも窓などの開口部を大きく設ければ、採光だけでなく風通しも良くなりますので決して悪いことはありません。



### 現代だからこそ、壁を魅せる。

その昔、漆喰の白い壁以外では、他に仕上げの（左官の）塗壁がない時代に、日常の茶飯をひとつの芸術として茶道を確立した千利休は、田舎にある草屋の荒々しい土壁に美を見出したそうです。本来は雨や風を防ぐだけの用途であった土壁が、茶室などに代表されるように壁をデザインし、仕上げを変えることにより、表情を変えそれらの陰影までも美の対象としました。

現代の家づくりでは、壁を魅せるという言葉や感覚は難しく聞こえるかも知れませんが、実際には少しの工夫でそれは実現します。

土壁は名の通り土でつくった壁です。自然の土には黄、赤、青、白などさまざまな色があります。それらの色の間には無限に近い天然の色調が存在します。それらの自然の育みから生まれた土は、どの様な色でも必ずその土地の自然に馴染み溶け込んでいきます。質感も素材ゆえに均一ではなく、必ず凹凸があり、それを壁に施す事により、光をかざすと自然とやさしい陰影をもたらします。

陽陽の光や夜間の照明での陰影が人に安らぎを与えてくれるでしょう。工業製品であるビニールクロスやペンキ、工場で作られた均一で作られた左官の塗り材では、この安らぎのあるやさしい陰影は決して表すことができません。



部屋の一面だけでも、それこそ絵画を飾るつもりで本物の素材である自然の土で壁をつくってみて下さい。きつと「美しさ」「ホッとする」「くつろげる」空間を表現してくれると思います。

「土の家」では、陰影を随所に作り出す為に土壁だけでなく、天井を格子状にする事により、高低でも陰影を作り出すなどの工夫を随所に施しています。

## 「土」夏は涼しく、冬は暖かく

皆様は土にどの様なイメージをお持ちでしょうか？ 現代の日本の家づくりには出番が少なくなっている素材とも言えますが、現在でも世界のほとんどの地域では土が家づくりに使われているのです。土壁はポロポロ落ちるイメージを持たれている方も少なくありません。少し話は逸れますが、そのポロポロ落ちる壁こそ、新建材（工業製品）の走りである繊維壁という建材です。誰でも簡単に安く施工ができ、現在でいうビニールクロスの前祖と言っても過言ではないものなのです。

本来の土壁は、ポロポロとは落ちません。私は京都で400年前の国宝の茶室の土壁を拝見する機会がありましたが、現在でもその機能や美しさは健在です。

そして、土壁の持つ魅力は『美』だけではありません。壁は、家の大部分の面積を要します。多孔質である土は調湿性能、蓄熱性能をはじめ、適度な遮音性能、厚さにより断熱性能、防火性能も有しています。さ

らに、夏場の余分な湿気を吸収するためさらりと涼しく感じ、冬場は夏場に溜めた湿気をゆっくりと吐き出して体感温度を上げ暖かく感じます。冬場といえども適度に湿気の吸放出をしているので、窓ガラスなどにつく、結露対策にも大きく貢献します。

Y'sの『土の家』は、2015年の夏に完成し、厳しい夏と冬の間色々な温熱環境データを計測しましたが、データの示す通り、夏はほぼエアコン機器に頼ることなく過り、冬場も日射やペレットストーブからの熱を土壁が蓄熱する性能を活かして、必要最低限の暖房で春を迎えることができました。百聞は一見にしかず、是非、一度Y'sのモデルハウス「土の家」でご体験下さい。

## 版築（はんちく）

『土の家』ではキッチンの壁と玄関のフアサードに版築を採用しています。



版築とは、板などを用いて囲い枠を作り、そこに湿った土を注ぎ込み、それぞれの層が決めた厚さになるように棒などで突き固めて圧縮しながら何層にも重ねていく技法です。

また『土の家』では、土の性能とデザイン美を融合させた『版築ヒーター』を考案し、対面キッチンの腰壁に採用しています。版築でつくった土壁の中に数十メートル分の配管を敷設し最高80度まで温度を上げます。土はゆっくりと温度を上げますが、一定の温度で上昇を止め、配管の熱を止めても土自体が蓄熱しているため、熱は急激に温度を下げずに放射熱を出して部屋を満遍なく暖めます。仮に熱源を止めたとしても、熱量の大きいこの様な土（版築）壁を造ると、壁自体が暖かくなるので快適です。その効果を別にも得る為に画像の版築壁はストーブの前に築造されており、ストーブからの熱を蓄熱できる様にも考えられ相乗効果も期待しています。

## 気候・風土に合せた工夫と 素材選び

現代では全国各地で同じ仕様で建てられているハウスメーカーなどありますが、本来、家はその地域の気候風土や住い手に合うように、無限ともいえる素材の組合せによつて造るべきだと思います。一番参考になり、勉強になるものは、先人が残してくれた建築物かも知れません。古の時代から現存する建築物の工法や厳選された素材での家づくりが日本の気候風土、地震などの天災

にも一番合っているのかも知れません。

## つくり手として

自然素材とは、もつと身近でもつとも日本の住いづくりに合っていて、そして欠かさない建材です。損得勘定や利便性だけでなく工業製品である建築材料（新建材）を家づくりに使用しても、わびもさびも存在しません。自然の素材である本物の材だからこそ生まれる『自然美』への感情だと私は考えます。今の時代だからこそ、合理的な理由だけでなく、そんな日本人としての、いや人としての心の余裕を取り戻すためにも、私はこれからも家づくりに土を取り入れながら、土と戯れたいと考えています。

解説/山本康彦◎1968年神奈川県鎌倉市生まれ。18歳から職人として30年近く湘南の地で家づくりに携わる。土を利用する建材、版築製品の研究・開発、販売などに従事。一級建築士だけではなく、古民家鑑定士などの資格も30以上持っており、伝統的な構法や建材にも造詣が深い。近代の建材（新建材）や工法の矛盾や実害を肌で感じ、人が住まう家というものを原点から見つめ直す。エコブームに流されないパッシブで地域循環型の家づくりをめざし、未だにすべては解明されていない伝統的な工法や素材について研究や開発に余念がない。



取材協力

株式会社ワイズ

〒253-0021 神奈川県茅ヶ崎市浜竹3-4-64  
TEL: 0467-88-3903 FAX: 0467-88-3907  
URL: <http://www.ys-no1.co.jp>  
mail: [ys-no1@ys-no1.co.jp](mailto:ys-no1@ys-no1.co.jp)

